

平成22年6月1日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17320092
 研究課題名（和文） 歴史学における規範と認識：21世紀歴史叙述の存立基盤に関する国際的総合研究
 研究課題名（英文） Norms and Cognition in Historiography: A study of the philosophical foundations of historiography in the 21st century.
 研究代表者
 佐藤 正幸（SATO MASAYUKI）
 山梨大学・教育人間科学部・教授
 研究者番号：90126649

研究成果の概要：本研究では、「歴史における道徳と科学」に替えて「歴史における規範と認識」という新たな分析視点を提起し、認識の学問として発達してきた西洋の歴史学と、規範の学問として展開してきた東アジアの歴史学を比較検討した。その結果、歴史叙述自体に認識的な要素と規範的な要素があり、この2要素のあり方が歴史叙述の持つ政治的・社会的役割を多様なものにしてきたことを解明した。加えて、対立する宗教を超えて安定した世界を目指す21世紀においては、「叙述」「記録」という行為が世界理解の共通基盤となることを立証した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	2,900,000	0	2,900,000
2006年度	2,900,000	0	2,900,000
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
年度			
総計	12,300,000	1,950,000	14,250,000

研究分野：史学一般

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：時代区分、歴史叙述、歴史的時間、歴史認識、紀年法、規範と認識、規範歴史、認識歴史学

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は平成11-14年度に行った基盤研究(B)において、認識の学問として発達した西洋の歴史叙述を詳細に検討した。その研究成果は平成13,14,15年に主催した3回の国際研究集会において世界の専門家の中で発表され、英文論文及び単著『歴史認識の時空』として公刊された。

(2) 本研究はこれを発展させたもので、研究分担者及び海外の研究協力者と国際的総合研究を行うことによって、認識の学問として発達した西洋の歴史学と、規範の学問として

展開してきた東アジアの歴史学を分析検討し、その上で、歴史学自体に内在する規範的要素と認識的要素を整理統合し、21世紀の歴史叙述の存立基盤を理論的に構築せんとした。

2. 研究の目的

(1) 「歴史とは何か」といった歴史への理論的問いかけは、ここ数年、世界の歴史研究者の間でかつてない程の学問的関心を喚起している。研究代表者は過去15年で58回、海外から講演・研究発表に招待された。しか

し多くのテーマは、「歴史と記憶」に代表されるように、欧米主導の発想のもとに行われてきた。

(2) 本研究は、その思考枠組が日本人にしか考えつかない視点に立った独創的研究であり、従って、歴史理論研究の分野で、日本人の研究が世界の学問に貢献できる極めて数少ないテーマのひとつである。

(3) 本研究は、「歴史学における道徳と科学」というこれまでのパースペクティブに替えて、「認識としての歴史と規範としての歴史」という新たなパースペクティブを提示したところに、その学問的特色がある。

3. 研究の方法

(1) 研究の主たる方法は、研究代表者が各年度の具体的テーマに関して研究草稿を準備し、研究打ち合わせ等の会合で、これを研究分担者に批判的に検討してもらう手法をとった。

(2) 研究協力者は全員外国人研究者で海外に居住している。彼らは本研究課題をその一部に含む各自の研究プロジェクトをもっており、これまでも共同して研究を行ってきた実績を持つ。海外の研究協力者とは電子メールによる日々の討議とは別に、それぞれ年2-3回は国際会議で一緒になるので、その機会を利用して共同討議を行ってきた。本研究もこの研究方法を採用した。

4. 研究成果

(1) 平成17年度は、歴史叙述における認識と規範に関して以下のような研究を実施した。

①時間の構築(chronology):東アジアにおける「年号と干支による紀年法」と「西暦=キリスト紀年法」の併用に見られる歴史的時間認識の規範的・認識的特質を整理した。

②時間の分割(periodization):東アジアにおいては種々の時代区分が提示されてこなかった事実を、西洋における「解釈の対象としての歴史」と対比しつつ要点を整理した。

③歴史的パースペクティブ(historical perspective):規範歴史学にはなぜパースペクティブという発想そのものが生まれなかったかを、東アジアにおける歴史叙述の歴史を検討しながら論点を整理した。

④歴史叙述の規範的性格と歴史的客観性との関連を『論語』における孔子の客観的叙述理念を中心に分析した。

⑤上記の研究成果を、7件の国際学会で研究発表した。

(2) 平成18年度は、歴史叙述における認識と規範に関して以下のような研究を実施した。

①歴史的時間をどのように認識してきたかを、特に歴史学にとって重要である「年」の

認識を中心に研究した。

②歴史上数多く存在してきた紀年意識を、時間意識の規範形成プロセスを中心に考察した。

③視覚化された時間・共時化された時間としての歴史年表を中心に、これが歴史意識の規範形成に如何に関わったかを検討した。

④世界各地の「地域的紀年法」と「キリスト教紀年法」との時間の共存関係の様態に関して考究した。

⑤上記の研究成果を、6件の国際会議で研究発表した。

(3) 平成19年度は、歴史叙述における認識と規範に関して以下のような研究を実施した。

①歴史的空間意識の形成が、歴史認識に果たす役割についての基本視点を設定した。

②イメージされた世界像としての歴史的な世界地図を、図像学的に分析した。

③日本中心型世界地図を歴史現象学に分析し、この世界像が日本人の歴史認識、特に世界史認識の規範形成に果たした役割の分析を行った。

④歴史的空間意識を世界各地の歴史的自己中心型イメージマップを中心に分析し、歴史的空間規範の形成プロセスを考察した。

⑤国際学会で5件の研究成果発表をおこなった。

⑥本研究に関わる国際研究集会を、海外からの参加者19名を得て12月6-8日山梨大学で開催した。会議論題は“Historical Studies in the 21st Century: Discipline, Discourse and Education”。

概要は以下の通りである。12月6日、(基調講演):佐藤正幸(山梨大学教授)「東洋と西洋における歴史の元型」。

第一セッション「ヒューマニズムと歴史的思考」(司会:アントニス・リアコス)、報告:ユルン・リュゼン(ドイツ・エッセン高等研究所長/教授)「現代における諸文化の統合と差異」、サンジャイ・セー(オーストラリア・ラトローベ大学教授)「歴史叙述と非一西洋の過去という課題」、黄俊傑(台湾・国立台湾大学教授)「新ヒューマニズムの一形式としての歴史的思考」、(論文参加)。特別講演:張芝聯(中国・北京大学名誉教授)「私と日本人歴史家との出会い」。

第2セッション「21世紀の歴史叙述」(司会:ドミニク・サッシュェンマイヤー)、報告:イルムリーネ・ファイトブローズ(オーストラリア・ディーケン大学教授)「歴史学の倫理的側面」、リチャード・ヴァン(アメリカ・ウエズリー大学教授)「読書人としての歴史家」、エドアルド・トルタローロ(イタリア・トリノ大学教授)「史料の探索と過去の再構築」。

12月7日、特別講演:ジョージ・イッガーズ(アメリカ・ニューヨーク州立大学教授)「21世紀初頭における世界

認識の再構築」。

12月7日、特別講演:ジョージ・イッガーズ(アメリカ・ニューヨーク州立大学教授)「21世紀初頭における世界

認識の再構築」。

のグローバル化に対する歴史叙述と歴史思想」。第3セッション「西洋における歴史的思考」(司会：王晴佳)、報告：アントニス・リアコス(ギリシャ・アテネ大学教授)「歴史方法論と規範性」、ドミニック・サッセンマイヤー(アメリカ・デューク大学教授)「エキュメニカルな歴史としての世界史」、エヴァ・ドマンスカ(ポーランド・ポツナニ大学教授)「抑圧された者のイデオロギーとしての反一歴史」、クリス・ロレンツ(オランダ・アムステルダム自由大学教授)「史学史研究の政治的側面に関する諸問題」、ユルン・リュゼン(ドイツ・エッセン高等研究所長/教授)「グローバル化への挑戦と歴史哲学の応答」。第4セッション「東アジアにおける歴史的思考」(司会：エヴァ・ドマンスカ)、報告：アヒム・ミッターク(ドイツ・チュービンゲン大学教授)「20世紀以降の中国における歴史思想の変遷」、陳啓能(中国社会科学院会員)「ロシア史学史：形成・近代化・文明」、姜芑(中国社会科学院上級研究員)「文明史に関する新視点」、稲葉一郎(関西学院大学教授)「中国史学史の研究」(論文参加)、王晴佳(アメリカ・ローワン大学教授)「東アジア及び東南アジアにおける最近の史学史研究」、朱政恵(中国・華東師範大学教授)「天人相関説と正史列伝への影響」(論文参加)。

12月8日、第5セッション「過去を表象する形態の多様性とその統合」参加者：陳啓能(中国社会科学院会員)、エヴァ・ドマンスカ(ポーランド・ポツナニ大学教授)、ジョージ・イッガーズ(アメリカ・ニューヨーク州立大学教授)、姜芑(中国社会科学院上級研究員)、アントニス・リアコス(ギリシャ・アテネ大学教授)、クリス・ロレンツ(オランダ・アムステルダム自由大学教授)、アヒム・ミッターク(ドイツ・チュービンゲン大学教授)、ユルン・リュゼン(ドイツ・エッセン高等研究所長/教授)、サンジャイ・セー(オーストラリア・ラトローベ大学教授)、エドアルド・トルタローロ(イタリア・トリノ大学教授)、リチャード・ヴァン(アメリカ・ウエズリー大学教授)、イルムリーネ・ファイトブローズ(オーストラリア・ディーケン大学教授)、王晴佳(アメリカ・ローワン大学教授)。ジェラルド・グローマー(山梨大学)、服部一秀(山梨大学) 佐藤正幸(山梨大学)。

(4)平成20年度は、以下のような研究を実施した。

①本研究のテーゼである「歴史学の特性は、要素の結合のあり方によって決まるのではなく、むしろひとつの文化全体における歴史学の位置・役割によって部分の特性が、そして要素の結合のあり様が決まる。部分の性質が変わっても全体の性質は保存されること

があり得る」ことを、これまでの研究成果をもとに、最終的なとりまとめを行った。

②東アジアと旧共産主義諸国家においてはなぜ歴史が規範的であったのかを、その文化的背景としての「啓示宗教の非存在」との関係から考察した。本年度は特に紀年の特定方法に焦点を当てた研究を行い、東アジアにおける紀年法の非宗教的性格、旧共産主義国家における「脱宗教化によるキリスト教紀年法の継続使用」に関して新知見を得た。

③認識の学問として発達した西洋の歴史学(Cognitive Historiography)と、規範の学問として展開してきた東アジアの歴史学(Normative Historiography)を分析検討した。その結果として、歴史学の東西比較という見方をより深化させた視点である、歴史学自体に内在する規範的要素と認識的要素という角度から本研究のテーマを整理統合することが可能となった。

④本研究の成果の一部を、8件の学会(国際学会7件、国内学会1件)で研究発表した。

⑤これまでの本研究の成果を、歴史学的時間の持つ規範的側面と認識的側面を中心に集大成し、『世界史における時間』(山川出版社)として公刊した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- ① 佐藤正幸、(卓立・陳菲訳)、認知型史学与規範型史学、山東社会科学、8、19-25、2008、査読有
- ② 佐藤正幸、The Archetype of History in the Confucian Ecumene、History and Theory、46、217-231、2007、査読有
- ③ 佐藤正幸、比較視野中的歴史時間観、走向世界的中国史学、383-387、2006、査読有
- ④ 佐藤正幸、従比較視角看東亜史学、国際視野下的中国史学、82-88、2005、査読有

[学会発表](計20件)

- ① 佐藤正幸、World Images in Japanese Historical Imagination、国際シンポジウム：日本における山・地図・記憶、2010年1月27日、アメリカ合衆国・オールドドミニオン大学、
- ② 佐藤正幸、Historians and their World Images、文脈と理解に関する国際会議、2009年10月19日、台湾・国立台湾大学
- ③ 佐藤正幸、History Textbook as Something Which is Sacrosanct、国際歴史教育学会年次大会、2009年9月16日、ドイツ・ブラウンシュバイク大学

- ④ 佐藤正幸、The Limits of Humanity in Historical Perspective、グローバル化時代におけるヒューマニズム」に関する国際会議、2008年11月12日、インド・ゲーティンステイテュート/コルカタ
- ⑤ 佐藤正幸、East Asian Annalistic Historiography as a Reflexive Expression of Historical Narrative、歴史におけるリフレキシビティと批評に関する国際会議、2008年10月31日、ギリシャ・アテネ大学
- ⑥ 佐藤正幸、Civilization and Culture、国際概念史学会年次大会、2008年9月19日、韓国・ソウル国立大学
- ⑦ 佐藤正幸、Japanese Historiography 1600-1800、世界史学史国際会議、2008年9月13日、カナダ・アルバータ大学
- ⑧ 佐藤正幸、Knowledge and Skills in History Education、国際歴史教育学会年次大会、2008年9月8日、ドイツ・ミュンヘン大学
- ⑨ 佐藤正幸、Normativity and Cognitivity in Historiography、中国社会科学院国際歴史学会「今日の歴史学」、2007年11月8日、北京
- ⑩ 佐藤正幸、World Images in Historical Perspective、国際歴史理論会議「歴史学の新しい方向：地域史と全球史」、2007年11月5日、中国・華東師範大学
- ⑪ 佐藤正幸、Cartographical Emotions in East Asian Historiography、国際学術会議「政治・歴史におけるエモーションとは何か?」、2007年5月20日、ギリシャ・アテネ大学
- ⑫ 佐藤正幸、Homo Subjectivus: Master Narrative without a Center?、国際歴史学会「グローバルヒストリーに向けて」、2007年5月14日、イタリア・フィレンツェ・ユーロピアン大学研究所
- ⑬ 佐藤正幸、The Role and Function of History in the East and the West、中国社会科学院主催国際学術検討会“Asia and World Civilization: Theoretical Perspective”、2006年11月16日、北京
- ⑭ 佐藤正幸、Historical Consciousness and Chronological Table、国際歴史教育学会年次大会、2006年9月30日、エストニア・タリン大学
- ⑮ 佐藤正幸、The Constellation of East Asian Intellectuals、Shanghai World Forum on China Studies、2006年9月21日、中国・上海社会科学院
- ⑯ 佐藤正幸、History and Chronology、中国史学理論並史学史学会主催「走向世界的中国史学国際学術検討会」、2006年8月20日、中国・揚州大学
- ⑰ 佐藤正幸、Grounding Culture、エッセ

- ン高等研究所主催「グローバリゼーション時代におけるヒューマニズム」に関する国際会議、2006年7月7日、ドイツ
- ⑱ 佐藤正幸、East Asian Historiography in Comparative Perspective、国際中国史学研究会、2005年10月30日、上海・華東師範大学
- ⑲ 佐藤正幸、World Images in Comparative Perspective、中国社会科学院主催「世界文化に関する国際フォーラム」、2005年9月26日、マカオ工科大学
- ⑳ 佐藤正幸、Chronological Tables and the Reader of History、第20回国際歴史学会会議、2005年7月4日、シドニー・ニュー・サウスウェールズ大学、

〔図書〕(計4件)

- ① 佐藤正幸(単著)、山川出版社、世界史における時間、2009、99pp
- ② 佐藤正幸(共著)、Berghahn Books、Time and History、2008、200-219
- ③ 佐藤正幸(共著)、Berghahn Books、Many Faces of Clio、2006、262-278
- ④ 佐藤正幸(共著)、Sao Paulo・Contexto、A Historia Escrita、2006、124-157

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 正幸 (SATO MASAYUKI)
山梨大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：90126649

(2) 研究分担者

早島 瑛 (HAYASHIMA AKIRA)
関西学院大学・商学部・教授
研究者番号：90093450(H17)
藤田 弘夫 (FUJITA HIROO)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：601568758(H17-H19:連携研究者)
服部 一秀 (HATTORI KAZUhide)
山梨大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：60238029

(3) 研究協力者

ユルン・リュゼン (JÖRN RÜSEN)
ドイツ・エッセン高等研究所・教授
ジョージ・イッガーズ (GEORG IGGERS)
アメリカ・ニューヨーク州立大学・教授
ハーバンス・ムキア (HARBANS MUKHIA)
インド・ネール大学・教授
ヴェラ・リヒトマン (VERA LICHTMAN)
フランス・パリ大学日本研究センター・講師
李弘祺 (THOMAS LEE)
アメリカ・ニューヨーク市立大学・教授
アントニス・リアコス (ANTONIS LIOKOS)
ギリシャ・アテネ大学・教授
アヒム・ミッターク (ACHIM MITTAG)
ドイツ・チュービンゲン大学・教授